

4月1日はエイプリルフールと呼ばれ、嘘をついても良い日とされています。このエイプリルフールについての起源は諸説ありますが、イースターが近づいている中で、私たちクリスチャンはもう一度考えて見るべきことがあります。それはエルサレムに入場したイエスキリストを「ホサナ」と歓迎したにも関わらず、裁判では偽証を重ね、民衆には嘘を吹聴し、暴動を起こさせ、イエスキリストを十字架へと向かわせた時の事です。(ルカ23：14～28) イエスはピラトやヘロデの前に出たときもイザヤ書53章に書かれている通り、弁明などすることはありませんでした。イエスが十字架への道で経験しなければいけなかったことは、愛する者から裏切られることでした。私たちが生きている中で周りにいる人を傷つけてしまったり、反対に傷つけられたりする事を、イエスは先に経験し、どのようにするべきかを教えて下さいました。そしてイエスはその十字架の道を歩んでいる中で、女性たちに「エルサレムの娘。私のために泣くではなく、自分の子どものために泣きなさい」と伝えていきます。私たちは神の前に涙を持って祈ることがあるかもしれませんが。その涙は何のために出ているのでしょうか。もしかすると自分のためになっていないのでしょうか。別の聖書箇所では「重荷を下ろし休みなさい」「平安を得なさい」と言い、私たちの重荷をイエスキリストは背負ってくれました。ですから私たちは周りにいる人々の重荷を負い、平安を流していけるのです。しかし悪魔は「あなたは1人だよ」「誰もあなたの気持ちを分かってくれない」と思わせるようにし向け、私たちが周りにいる人々の重荷を負えないようにしていきます。そういう思いになると私たちは同情し合える仲間を作ろうとします。そしてそれが重荷を負い合っていると勘違いさせてきますので注意が必要です。悪魔の策略として本来しなければならないことの一部だけを変えてしまい、物事の本質を見失わせていくのです。悲しみや苦しみなどの重荷も二人で分け合えば楽になれると思っています。しかしイエスが教えている方法は均等に重荷を負う方法ではありません。くびきとは力がある方が支え、力がない方は負担がかからないようになっていきます。ですから私たちは重荷を負う事ができるようになりました。今日の副題は「負い合う家族」です。イエスの十字架を背負わされたクレネ人のシモンがいますが、使徒の働き以降に記されているシモンの子どもたちがクリスチャンとなっていることから、このシモンもイエスを信じるようになったのではないかと推測できます。反対にシモンがキリストを信じていなくては子どもたちがキリストを信じるものへと変わるなどできません。私たちが考えなければならない事は、私たちがどれほど、イエスキリストを現す人になっているのかということです。しかし私たちはイエスキリストを100%現すことなどできません。しかしこの部分だけは絶対に曲がらないイエスキリストを現していける部分があるべきなのです。本当にすべきことはイエスの十字架へ向かう姿から、今の私たちが自分のすべきことを見つけなければいけません。そしてそれは1人ですることではないことを伝えていきます。十字架の重荷を分かち合ったシモンのように、水を差し出した女性のようになりましょう。私たちはイエスが背負いなさいといわれている十字架を背負っているのでしょうか。それとも自分の十字架を自分で負って生活するのでしょうか。それはどちらもすべきことをしているので大きな違いはないかもしれませんが。しかし悪魔はほんの少しだけ外れるようにしていきます。私たちはもう一度復活後のイエスキリストがペテロを召しているところから、私たちがしなければならないことがあります。それを忘れてはいけません。救われた私たちを引きずり下ろそうと狙っている悪魔がいるということです。ですからいつも注意しなければなりません。私たちが向かうべきところは自分の子どもたちです。私たちに神にある子どもたちがいるのであれば、私たちの内側から愛が流れ出ていることとなります。しかし子どもがいなければ、イエスキリストが十字架にかかる意味がなくなります。私たちの重荷はイエスが負って下さりました。それは周りにいる人々の重荷を背負うためです。一時だけ負っているだけではなく、いつも負いつけていかなくてはなりません。いろいろと言いついて、結果的には自分のためになっていないのでしょうか。そういう弱さを認め、神に拠りたのみながら進んでいきたいと思えます。**①キリストの愛は1人でないことを伝える。**私たちは、神の家族と共にいる時や十字架の道を思い起こすとき、1人ではないことを知りましょう。私たちは1人と感じている時は周りの人を自分のために使おうとします。私たちは1人ではありませんから、私たちは周りの人々のところへ出て行きましょう。たとえ裏切られたとしても、私たちはその人の隣に立ち続けましょう。それが私たちのすべきことです。なぜそれができるのか、それは私たちが同じようにされてきたからです。(伝4：8～10) 私たちは三つ抛りの糸のように強くされています。しかし強くなったのであれば、しっかりと役目を果たしていきましょう。ただ強い糸にされても使わなくては強くなった意味がありません。私たちは自分の居心地がよい安住の地を捨てていきましょう。**②キリストの愛は負い合う家族を受け入れることを伝える。**クリスチャンにとって必要なことは裏切られても逃げないということです。裏切られても愛するということです。もう一度愛する事ができるのであれば、本当の裏切りにはなりません。ペテロはイエスを3度も否み、イエスの前から逃げました。しかしイエスの元へ返ってきました。しかしユダは戻ってくる事ができませんでした。これは大きな違いです。私たちは裏切ってしまったら、裏切られるかもしれません。しかし逃げ続けることをせず、もう一度やり直す事ができるようになりましょう。(ガラ6：1～2、5) 私たち神の家族はお互いに良い方向へ導くために存在しています。どちらかが倒そうな時には必ず助け手が起こされます。私たちはイエスの重荷を背負うことはできませんが、私たちに負えるようにしてくれています。私が倒れた時に助けてくれるのは私の隣にいる人なのです。**③キリストの愛はともに喜び、泣くことを教える。**(マタイ5：4) 悲しんでいる人は幸いです。その人は慰められるからです。私たちは泣く者と一緒に泣き、喜ぶ者と一緒に喜んでいきますでしょうか。(詩篇126) これは自分なりのやり方でやっても意味がありません。その人の立場にたって喜んだり、悲しんだりすることです。すなわちそれはとりなすということです。私たちは自分の立場で周りの人と接していませんか。私たちはできない人を裁きながら、隣人になることはできません。私たちも同じ弱さを持った人間であることを自覚して隣人になっていくのです。しかし私たちは自分ができていない部分においては、隣人を助けていくことはできません。ですから強くなる必要があります。私たちはイエスを愛する目を持って、隣人を見て愛していくことを今日していきたいと思えます。イエスを信じているのであれば、隣人も信じていくことができます。私たちに重荷を負わなくてはいけない人々があります。そのために私たちが先にイエスキリストによって救われたのです。それを継続していくために神の家族が与えられています。イエスキリストの受難を感じながら、互いに支えあっていきましょう。(要約者：平澤一浩)